

## 『うきことあれや』 シノプシス

脚本:初稿(2007年8月)→2稿(同。一部修正)

有希子(うきこ)(16)は都心の女子高に通う高校生。沙世(さよ)、鈴香(16)、愛李(あいり)(16)といった友人たちと表面的には楽しく過ごし、学校後も彼女たちと携帯メールで繋がっているが、その実、心空しい日々を過ごしている。授業中に教室の窓から見える高層ビル群はまるで“墓場”のように見えていた。

ある日、電車で紗世たちが鈴香に悪ふざけで隣に立っている地味な中年サラリーマン(公男(きみお)(36))に“痴漢された”と演じるよう囁すが、鈴香は戸惑って何もできなかった。翌日からクラスを巻き込んだ仲間内での鈴香への無視がはじまり、有希子も戸惑いながら同調する。鈴香への嫌がらせは翌日、他愛のないきっかけで終了し、胸をなでおろす有希子。

一方、都心の高層ビルで働く公男は、期待されて転職してきたものの全く成果を上げられず会社で孤立し、現在は社内プロジェクトと称する閑職に追いやられ、毎日うつうつとした日々を過ごしていた。薬は飲むものの「休む」とすら言い出せない公男。

公男は前職の先輩と飲んだ際、尊敬する元上司が50代の若さで亡くなったことを知る。「ぶち抜け! のう?」厳しくも優しい上司を忍ぶ二人。「俺たちも、もう決して若くないんだな……」

ある日、有希子は仲間との学校帰りにフリーターの洋介(20)に出会い、仲間に隠れて付き合いを始めるが、結局、“やり逃げ”されてしまう。失意の中、沙世らに対してあいまいな態度をとり続けたため彼女たちに“ハブられて”しまう。親友の鈴香も一緒になって陰湿な無視をしてきて、激しく落ち込む有希子。あつという間に「あいつはやり逃げされた」とクラス内で陰口が広がる。

公男は社内で子供じみた“仲間外れ”にあい、落ち込んで帰路、繁華街を一人トボトボと歩く。彼の心象風景には喧騒もなくネオンサインが暗く“逆さ”に映っていた。同じ時、“逆さ”の世界を歩く傷心の有希子が、自分と同じ世界でトボトボと歩く公男を見つけ、有希子はいよいよ公男に声をかける。驚く公男。

公男と有希子の他愛ないメールのやり取りが始まる。公男は何か辛そうな有希子に対し、世の中に“理不尽なこと”は多々有るのだから、人はそれに耐え続けなければならない、と諭す。

クラスの誰からも言葉をかけられない有希子。絶望の淵に居た彼女だったが、彼女の心の中に「ぶち抜け! のう?」という囁れ声が聞こえる。憑かれたように、紅潮して鈴香を、そして高飛車な紗世を問い詰める有希子。これまでイジメの黒幕は愛李だった。

ターミナル駅で“大人な彼氏”と待ち合わせをしている愛李に、憤怒の形相で言葉にならない叫び声を上げる有希子。泣きべそをかき愛李。

偶然、この光景を目撃した公男の頬が紅潮してくる。

上司の嫌味を跳ね返し、「休む」ことを決めた公男。彼の心象風景は小鳥がさえずり花咲き青々と茂る古の山道だった。

一人ぼっちの教室から高層ビル群を眺める有希子。

「私には分かっている。この世に大した希望なんてない。うざい事ばかりだ……でも……」

高層ビル群が消え、公園の向こうに、緑の山々の姿が広がる。鳥の音がする。

「私には分かる……生きるって、そういう事だ」

有希子の瞳は生きる力に満ちていた。